

瀬戸内晴美

まふら

下卷

ふとし

下卷

瀬戸内晴美

新潮社

## ま ど う 下巻

---

昭和53年6月10日 発行  
昭和53年10月30日 9刷

著 者 <sup>せ と う ち は る み</sup>瀬 戸 内 晴 美  
発行者 佐 藤 亮 一  
発行所 株式会社 新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

電話 <sup>業務</sup>03(266)5111 振替東京4-808  
<sup>編集</sup>03(266)5411

印刷所 株式会社金羊社  
製本所 大口製本株式会社

定価 950円

---

© Harumi Setouchi, Printed in Japan, 1978.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ま  
ど  
う  
下  
巻  
目  
次

雷 夏 ほ 日 銀 五 ほ 都 翡 淵  
雨 帯 お 照 河 月 と 忘 翠 の  
 ず き り 雲

119 107 94 81 69 55 42 31 19 7

|             |            |                  |                  |            |            |             |                       |            |
|-------------|------------|------------------|------------------|------------|------------|-------------|-----------------------|------------|
| 冬<br>の<br>道 | 夜<br><br>寒 | か<br>く<br>れ<br>里 | コ<br>ス<br>モ<br>ス | 鈴<br><br>虫 | 残<br><br>照 | 獅<br>子<br>座 | さ<br>る<br>す<br>べ<br>り | 炎<br><br>道 |
|-------------|------------|------------------|------------------|------------|------------|-------------|-----------------------|------------|

|     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 239 | 225 | 211 | 198 | 186 | 173 | 160 | 147 | 132 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|

装  
幀  
  
高  
山  
辰  
雄

ま

ど

う

下  
卷



## 淵の雲

ぶようにいった。

「落ちついて下さいね。広瀬さんが急病で、今、入院したんです」

「入院？ 急病って！」

典子は全身ががくがく震えてきた。

「とても急だったの、最初、とにかくお宅へ帰そうとしたんだけど、何だか危険で、一刻も早く病院へ行った方がいいと思って」

「どこにいます。教えて下さい、すぐ行きます」

ユキは病院の名と電話番号と、目じるしの道順を教えた。典子はユキのいうことを電話器の側のそなえつけのメモ帳に書きつけながら、自分の字がよく見えなかった。

「病氣ってどんなでしたの」

ようやくそれを訊くことに気づいた。

「急に七転八倒に苦しみだして、脂汗流して、声も出なかったんですって」

「マヤさんの部屋ですね」

典子はそのことがすらすらと出た。

「ごめんなさいね、この際だから、許してやってね」

「そんなこといつてる場合じゃありません。色々御迷惑かけました。おしらせ有難うございます」

切口上でいい典子は電話を切った。切ったとたん、目の

その電話がかかってきたのは真夜中の一時をすぎていた。

「奥さん、ごめんなさい」

女の声を最初、典子は聞き覚えのないものと思った。黙っていると、

「もしもし、あたし、ユキです」

という。

「あ、ごめんなさい。声があんまりちがってたから、どなたかと思って」

「そうでしょう、上ずってるものだから、びっくりなさらないでね、広瀬さんがね」

ユキはそこをことばをきった。

「えっ、どうかしましたか。主人がどうしたんです」

なぜか背筋に水を流されたような悪寒があつて典子は叫

前がずっと昏くなり、その場にぐずれこんでしまった。

「どうしたの、いったい」

ゆさぶられて典子ははっと氣をとり直した。パジャマ姿の一郎が顔を覗きこんでいた。

「何だか、様子がおかしいんできてみたらこうだ。どうしたの、どこからの電話なの」

「パパが……」

「どうしたんだよう」

「病気で入院したんだって……女の人の妹から知らせてきたの、今から、すぐいきます」

「おれもいくよ」

「いつてくれる？」

「当り前じゃないか。すぐ支度しなさい。金はあるの」

「大金はないわ、でも明日銀行から出せるから、少しはあるから」

「泊りこみになるかもしれないから、そのつもりで用意しなさい。後でおれ、運んでやるから」

典子はうんうんと子供のようにうなずいた。

何をどう準備していいかわからなかった。

とにかく、洗濯出来ている哲郎のパジャマを包みはじめたが、病院では浴衣の方がいいのかもしれないと思ったり、そんなことで手許が狂う。

「何ぐずぐずしてるの、早くしろよ」

一郎がもう、その間に表に走り出しタクシーを拾ってき

た。

「いいよ、荷物は、あとで運んでやるよ」

一郎にうながされて、それでも典子はボストンバッグにつめたパジャマやタオルやティッシュペーパーをかえあげた。そんなものは、夜が明ければみんな買えるものだと思

気づくゆとりがない。

「ハンコ持った？」

一郎が訊く。

「入院の手つぎやなんかでいるんじゃないの」

「あ、そうね」

典子は自分の氣の動揺しきっている愚かさが情けなく、今は一郎がひたすらに頼もしくなってくる。

車が走り出して氣づくと、一郎が典子の肩をしっかりと抱きよせるようにしていた。

こんなに身近に一郎の軀を感じたことはなかったと思う。

哲郎と二人でホテルからタクシーに乗って走ったのが、もう何カ月も前のような氣がしてきた。

深夜の町にも走りつづける車が案外多いのに典子は愕いた。典子の膝に一郎が大きなしわくちやのハンケチをよこ

した。典子はそのハンケチをとりあげて、あふれつづける涙をぬぐった。

哲郎が死ぬような気がしてきた。いや、もう死んでいるのかもしれない。ユキはそれがいい難くて、ただ入院したとだけいったのではないだろうか。

今、死んだらあんまりだ。せめて、死ぬ時くらい、自分の目の前で死ぬべきではないか。これじゃあんまり私はふみつけにされすぎている。私の立場はどうなるのだ。

そんな怒りの下から、あなた、死なないで、という叫びがこみあげてくる。

何もかも許します。もう何もいけません。別れてあげます。いえ、私が必要ならいてあげます。でも、このまま死なないで。

「大丈夫だよ。今から、取越し苦労したって仕方ないじゃないか」

一郎が運転手に気がねして低い声でいう。

「いいかい、おれがついてるんだから、かあさんはしっかりしてなきゃだめだよ。どんなことがあっても逆上なんかしたら、だめだよ、わかってる？」

「うん」

典子はうなずいた。

「ほんとかなあ。もっとかあさんってしっかりしてるのか

と。思ってたよ。しっかりしてくれよ、な、万一、どんな奴があらわれても、かあさんの方が平然としてなきゃだめなんだよ」

「わかってる」

病院は三階建の古い建物だった。

「救急病院だな」

と一郎がいったので下ばかりむいていた典子は顔をあげて見上げた。真暗な空に、風船を途中までふくらませたようないびつな月がかかっていた。月の色が白っぽく淡々しいのが不吉なような気がしてぞっとする。

森閑とした病院の玄関に螢光燈が冷く光り、壁ぎわの傷んだビニール張りの長椅子に、猿の縫いぐるみの玩具おもちゃが今にも落ちそうに辛うじてひっかかっている。手足の長い手づくりのような不細工な猿は、頭を下にしてだらんと片腕をのばし、曲芸をしているように見えた。ボタンの目だまがひとつとれかかって少しぶら下っているの、表情が生まれ、泣き笑っているように見える。

一郎が事務室の戸をノックし、中へ押し入り、人を探している間に、典子は空白になった頭で、その猿をまじまじとみつめていた。

「二階の三七号だつて」

ふりむくとカーディガンを着た老人が受付に立っていた。どこかで赤子の泣き声がする。

突然、表の方にサイレンの音がして、それが次第に近づいてきた。また病人か怪我人が運ばれてくるのだろう。神経に突きささるようなサイレンの音が典子を震え上らせた。ああして、哲郎が運ばれたのかもしれないと思う。病状がわからないだけに不安はつのるばかりだ。階段につまずいて典子はつんのめった。

「どうしたの、しっかりしなさい」

一郎の声がこんなに哲郎に似ていたか？ 典子はうるんだ目をあげた。

一郎が典子の手をとってひきあげた。

病室はすぐわかった。

「いいね、とにかく落ちつくんだよ。誰がいても無視すること」

一郎が入口で囁いた。一郎がノックすると、内側からすぐ扉があげられた。

小柄な和服の女が青ざめた顔で扉のかげで身をひいた。

一郎が典子の肩を押すようにして中へ入った。典子は、一瞬に見た女の顔が、さっき病院の上にかかっていた輝きのない月のように見えた。目も鼻もないのっぺらぼうのよ

うに感じた。女が顔をうつむけて、典子のほうを見なかったからかも知れない。

典子は、真直ぐベッドに近づいた。薄暗くした燈の中に、哲郎が眠っていた。うすく口を開けて、ゆるんだ頬をしている。燈の暗いせいしか、顔に隈がかぶさって死人のように見えて、咄嗟に典子は掌を伸ばし、口の間近に持っていた。

掌にほの暖かい息が伝わった。

「生きてるわ」

典子は、横にびたりと付添った一郎を振向き、泣き声でいった。

「当り前じゃないか」

一郎が、これも声を極度に押し殺している。

「薬で眠っていらっしやるのです」

背後で低い声がした。典子がさっと振向いた。

「お世話になりましたそうで」

歪んだ月のような女の顔に、目や鼻や口が滲んできた。典子がひそかに胸に育てていた顔とはおよそ似もつかぬ顔があらわれた。

ユキとは姉妹と思えないように骨格も顔たちもちがっている。小柄できゃしゃな女だ。目が細く切れ長で観音の目のように伏目に瞼を落している。薄い透きとおった様な皮

膚に唇の紅だけがきわだっていた。

とっさに清潔な印象を受けたことを典子は信じられず打ち消したかった。

「前川でございます。こんなことになりまして、申しわけございません」

女は消え入りそうな声だが、一語一語を押し出すようにはっきりいった。

「ぼくは息子です。御迷惑かけました。病気は何ですか、どういふ状態だったんですか」

一郎が落ちついた声でいった。

「突然、苦しまれまして、ここへ来て、胆石らしいとわかったのですが、最初は盲腸かと思ひまして」

「胆石？」

典子が声をだした。

「胆石なら、たぶん、あんたくらいの年に、一度、伊豆の旅先で死にそうな目にあったといつてたわ」

「その時どうしたんだ」

「何だか管をのんで出したんですって」

「でも、ずっと、一度もそんなことなかったじゃないか」

「そうね、今、いわれるまで、わたしだってすっかり忘れてたくらいだから、パパだって忘れてたんじゃないかしら」

「何しろ、こんな時間でしたし、お帰りになりたいとおっしゃって、お送りしかけたんですが、あんまり苦しめるものですから、怖くなって救急車で思ひきって、こちらに運んだのです。さし出たこととして申しわけございません」

女は軀をたたみこむようにして深いお辞儀をした。

「あなたのところでまだ幸いでしたわ、よそでこんな目にあっていたと思うより」

典子のことばを女は鞭のように聞いたのか、目にたつほど、びくりと肩を震わせた。

「医者に逢えませんか」

「当直の先生がいらっしゃいますが、もうお休みで」

「看護婦長は」

「この階にやはり当直の人たちがいるようです」

「案内してくれませんか」

一郎のことばに、また女はびくつと脅えたように震えた。一郎が女を部屋からつれだしてから、典子はその場に提灯をたたむように崩れこんだ。ベッドの縁に身を支え、哲郎の顔を見つめた。毛布の下に手をいれ、哲郎の手をさぐった。熱っぽい手が典子に捕えられた。典子はその手を夫のすべてのように撫でさすった。

「死なないで」

涙がこみあげてきて、ベッドに顔を伏せた。

あなた、このまま死んではいやだわ、あんまりよ。このままでは。

胸の奥からわき上ってくる想いを哲郎につげたいにも、哲郎の深い眠りは、哲郎を別の星につれ去っているように、何の手応えもなかった。

あんな人のところで病気になるなんて、何てことなの、でも、いいわ、何をしても生きていてほしいわ、生きてさえいればけんかも出来るし、いいこともいえる。わたしがこの人の妻です。お引き取り下さいって、あの人を追っばらうことも出来るわ。このままでは、あんまりみじめよ。

哲郎がみじめなのではなく、自分がみじめなのだと思う。この期に及んでも、自分の気持中心にしか考えられないのは何という業か。

そう反省がわいた時、このまま、哲郎が死んでしまえば、もう二度と、煮湯をのむ想いはしないでもいいのだという気持がおこった。

その方が楽だ。一郎がいていた記憶の樂觀性のおかげで、想い出の中の哲郎は浄化され、やさしかった想い出、愉しかった想い出だけで飾られるのではないだろうか。

「そんなことはない」  
はつきりと哲郎が口をきいた。

「えっ、あなた、目がさめてたの」

典子は愕いて哲郎の上にかがみこんだ。夢の中のことばらしく、哲郎は目を閉じたままだし、それまでたてなかつたいびきが聞えてきた。

典子はまた哲郎の手を毛布の下で握りしめた。

一郎が帰ってきた。ひとりだった。

「あの人は？」

「帰ってもらった」

「あら、わたし、何も話してないわ」

「話なんか、この際しないでもいいじゃないか」

一郎がむっとした口調でいう。そういう時の表情や口調が、気味が悪いくらい哲郎に似ていた。

「でも、お礼もいわなきゃならないし、どういう状態でこ  
うなったか、もっとよく聞いておきたかったわ」

「みんなおれがしておいたよ」

一郎が機嫌の悪い声でいい、ズボンのお尻のポケットから皺くちやの煙草の袋をとりだして、二、三本しか残っていないらしい一本に火をつけた。

「医者にも逢ってきた。今夜は検査するにもどうしようもないから、明日胆石なら手術することになるそうだ、相当大きいのが入ってるのじゃないかっていった」

「今まで、ちっとも出なかったのにね」

「時々、この頃、痛がってたそうだよ」

「あら、どこで」

いつてしまつて、典子は唇を噛んだ。一郎は答えなかった。マヤの部屋で、そういうこともあったのか。マヤと過ごす夜の時間の方が長かった証拠だ。

「全快するまで、つまらないことはいわない方がいい」

「いろいろ話したのね」

「この際だもの、仕方ないだろ」

「どんな人だった」

「おとなしい感じだよ、消え入らんばかりに恐縮していたよ」

「肩を持つのね」

「そんないい方はしない方がいいよ、かあさんの方が、何てたつてこの際分が強いんだから、あんまりとげとげしないことだな」

典子は黙った。一郎がマヤに悪感情を持っていないことがわかった。それは典子を不愉快にした。

「かあさんはここに泊りたいだろう、今、看護婦に頼んでおいた。そのベッドを組立てればいいんだって」

一郎にいわれてみると部屋のすみに鉄製の折りたたみのベッドがあった。附添いのためのもので、マヤは遠慮して、椅子に坐っていたものらしい。

一郎は一人で器用にベッドを組立てた。若い看護婦が、蒲団と毛布をかかえて持ってきた。

「ここは附添さんの紹介もしますけれど、完全看護じゃないから、お家の方が附添われてもいいんです」

看護婦はてきばきと馴れた手つきでベッドを整え、病人の手首をちよつと握ってから出ていった。

「どうする？ 二人もいても仕方ないだろ、ぼくが泊ろうか」

「そうね、でも、今夜は、やっぱり私が泊りましょう。悪いけど、明日の様子で、また必要なもの取りに私がうちへ帰るわ」

「それじゃ、ぼくは今夜は帰るよ。大丈夫だね。明日朝、早く来るから」

一郎は典子の肩を両手で押えつけるようにしていった。「あんまり、くだらないこと、くよくよ考えない方がいいよ。何しろ、今は病人なんだから、色んなことは、病気が治ってからの話だ」

「わかったわ」

「なるべく眠るよう努力した方がいいな」

「うん、そうする」

見送ろうとすると、一郎は入口で典子を押しもどした。ひとりになって、典子はベッドに横になったが眠れそう

もなかった。今日の一日がむやみに長いように思った。どうしても顔の浮けないマヤの印象が心にひっかかっている。

一郎がああして落ついて帰っていく以上、哲郎の病氣はまあ、命に別状のあるものでもないのだろう。

それにしても明日の手術の結果がどうなるか。万一のとがあった場合、マヤを哲郎の枕頭に呼ぶべきかどうか。

典子はベッドの上にむっくり身を起し坐り直した。鉄製のベッドはその身動きで、ぎしぎし音をたてた。典子は膝の上に両掌を強く握りしめた。祈りたいと思ったが、祈る習慣を持たぬ典子は、祈りの姿勢をとることさえためらわれた。何に祈るのか、どう祈るのか。典子は自分の心の暗い淵を覗きこんだ。

神さまとも、仏さまとも、呼びかけの声がない。かといって、このまま、平然と眠ってはいられない。何でもいから、どうか、夫を扶けてやって下さい。この人がずいぶんわたしを裏切ったとしてもわたしは許します。この人の罪を許してやって下さい。元氣になって、またわたしを裏切ってもかまいません。このまま死んでしまっではあんまり可哀想です。まだしたいことがいっぱいあると思います。もししたいことの 하나가、もっと、女と関わりたいうなら、それも許します。もし、命を得て、わたしと別れたというのが最もしたいことだったら、それにも応じます。

わたしは決して充分なことをしてやってはいません。妻としても母としても後悔することばかりです。この人の裏切りの十分の一くらいは裏切りもしています。わたしにこの人を責める資格はないのです。もっと心から仲直りがしたいのです。どうぞこの人を許してやって下さい。

祈っているうちに胸の奥が熱くなり、涙が棒になって咽喉元へふきあがってきた。

涙の流れるにまかせていると軀の中が透き通ってでもいくように、すっきりとした気分になってきた。

離婚と引きかえにしてでも哲郎の命を扶けてほしいという発想が、われながら大げさだと思うが、今、その氣持に嘘がないと典子は思った。

「水をくれ」

哲郎がいった。典子は飛び上るようにしてベッドをすべり下りた。いつ、目が覚めていたのだろう。

「マヤ、水」

哲郎はこの部屋をマヤの部屋だと思っているのだろうか。それともうわごとか。

典子は、自分が水を運んだ時の哲郎の表情を思っただけで胸がさわいだ。たった今、別れと引きかえにこの人の命を扶けてやってくれと祈ったつつましきは一挙にふき飛ばされてしまった。嫉みと怒りがこみあげてきた。